



松平家文庫
二

~~213~~
2

逍遙文庫
文庫6
1293
2



繪本寫經袋二之巻目録

三天神之像

經津主命之像

武將素由之像

武具由之像

同具足之像

同弓矢之像

鞍轡押懸之像

三戰神之像

武甕槌命之像

將軍由來之像

同鎧胴之像

同左刀右帶兼馬之像

同鼓貝鑼幕之像

同撫神之像



馬綿袋二目録

士 氏 門 三 元 天 神 像



夫士農工商の四之集め是之圖寫して四卷とて其卷第一集之
附とて愛するものに物をあげたる氏門の神なり武振勇士軍器るまで連寫せ

畫工小三天神の儀
とありとあり武令
 乃守護之儀
 松皮
 三面六儀金源
 曹金茶こんらんらん
 衣六金らんらん
 津喃金 冠市金
 鎗宝珠金推金らんらん
 宝珠六金らんらん
 甲のろすらんらん
 松林らんらん
 衣すそらんらん
 高らんらんらん
 儀常のろすく

比沙門かき集すとも金源のろす

系る懸馬之場 腋指之始之場
 高良の神玉雲之場 神切皇后之儀
 六孫王經基之場 多田満仲之場
 源頼光瑞叟之場 頼光大江山入之場
 渡邊徳仁生切之場 源頼信海渡之場
 源頼義水清之場 頼義与武則對面之場

三秋神の像



引矢打物鉾とやまの守り給ふ神也
 國の天孫軍配之器物也

陽炎小
 大率あり

經津主像



武甕槌像



中細武神

神代書に天孫神
 中津國子降と歎と天孫神
 曰中津玉に横思神の海先住神城
 法暴不吹神平と曰とさから
 弓矢の天孫神の女を奪て押
 せんと欲不來神乃八年乃及
 天の返矢中里を死と中里を
 経津主の神は軍の初の内武甕槌の
 神進て曰唯津津神獨夫とて
 夫とあどとや神槌一故と
 神の三神授中天的唐牙とて
 依の不吹神をとてく平たよ
 先の中武神のくあり

武士 武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也
 武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也
 武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也



將軍 大おかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥
 おおかり漢名元帥



兵器

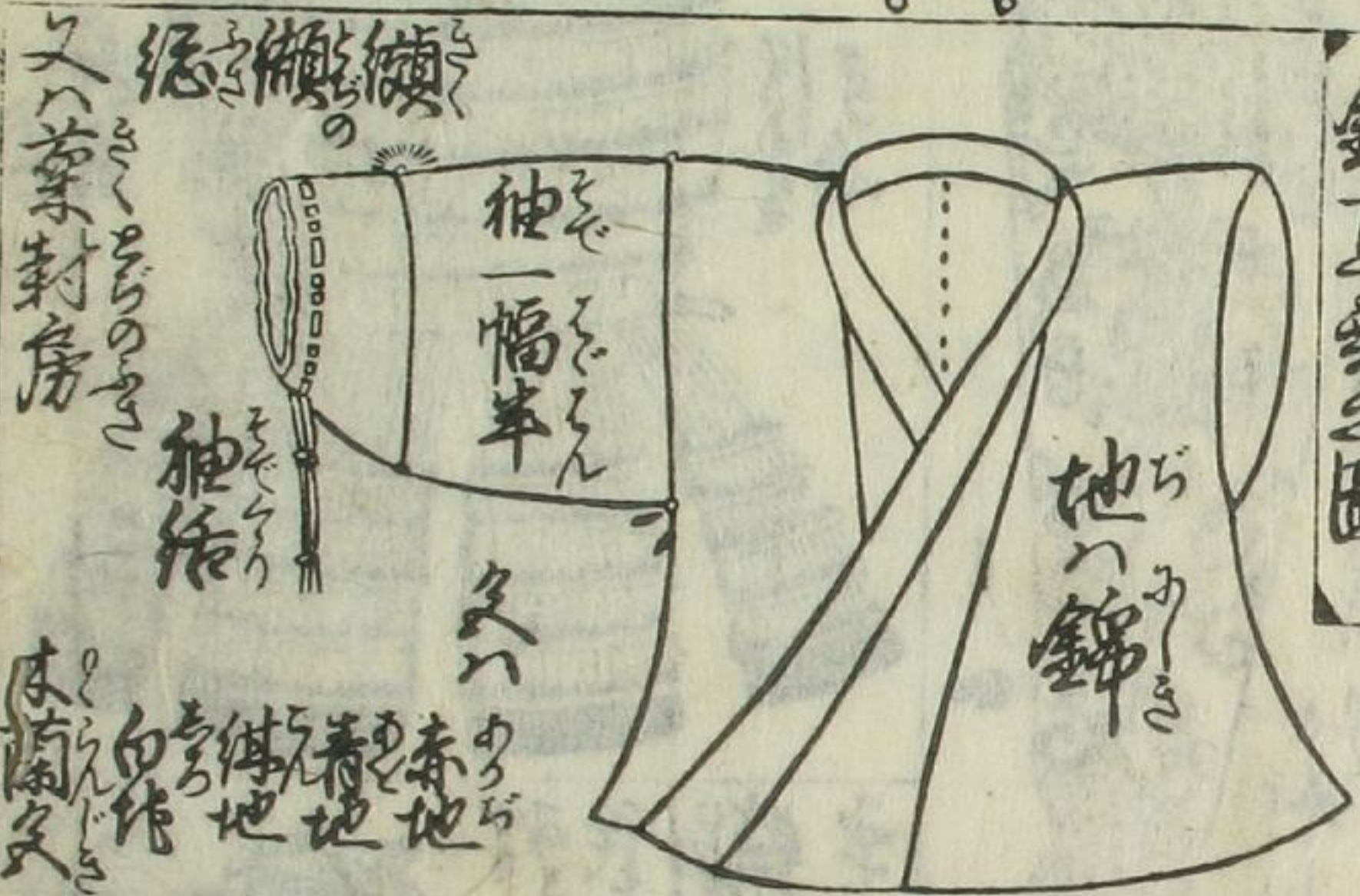
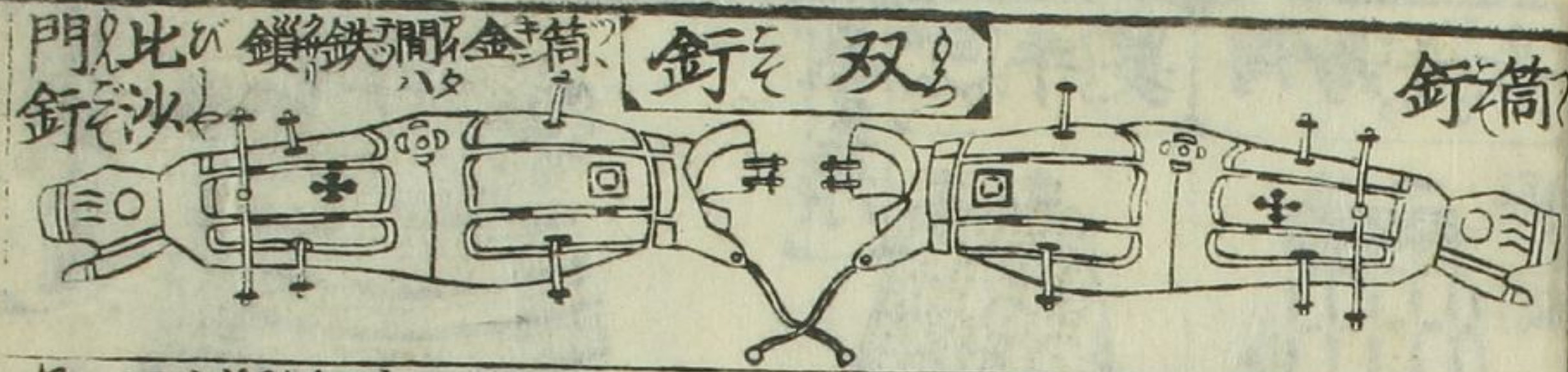
立 甲に龍頭とありて大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥
 物 大おかり漢名元帥

龍頭 **王** **凌** **圖**



武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也
 武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也
 武の勇剛なりて仁義の
 義あり計の帷帳の中に
 千里の外も交と領下れ守り也



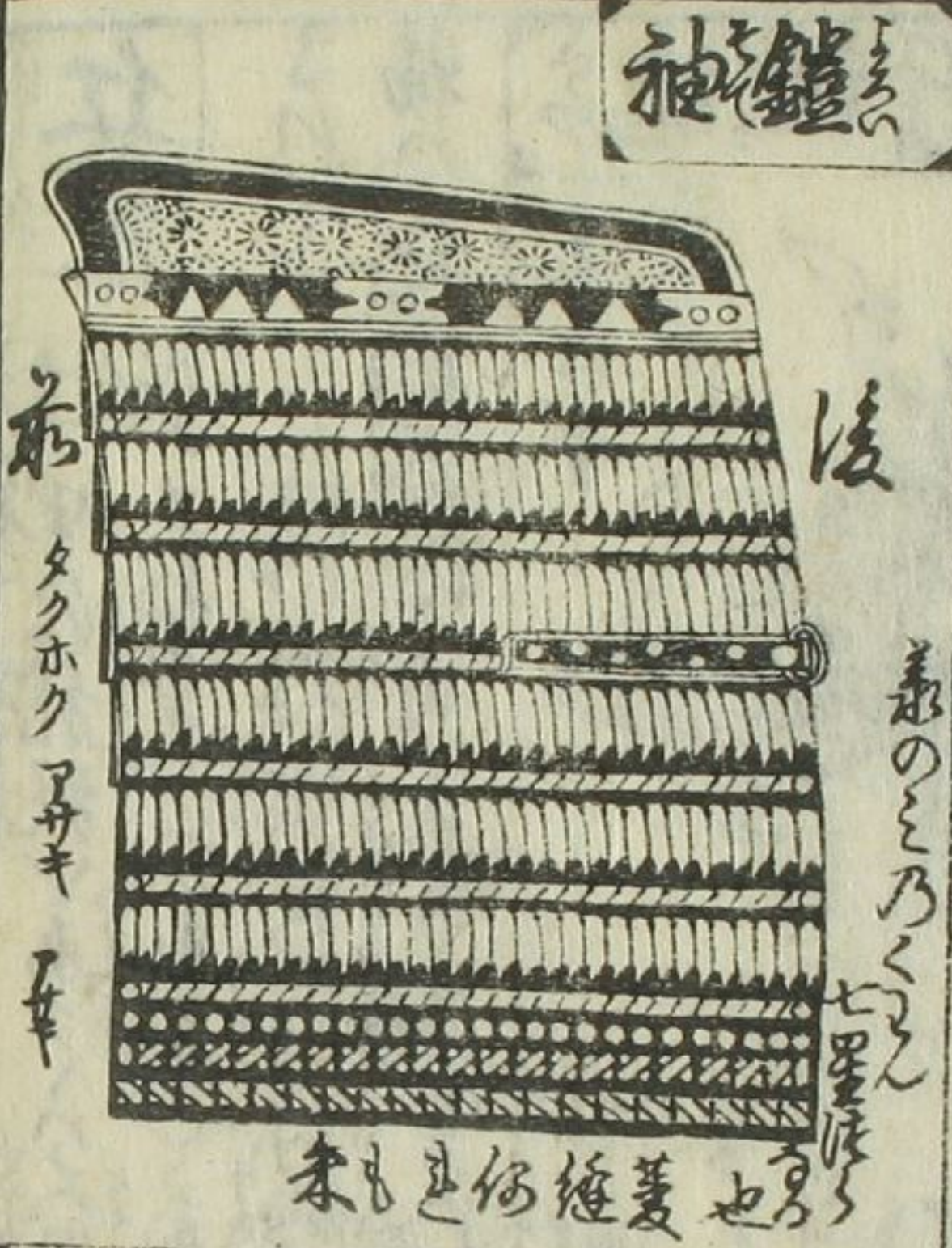


鎧直鎧之圖



筒勝者 又全 具指

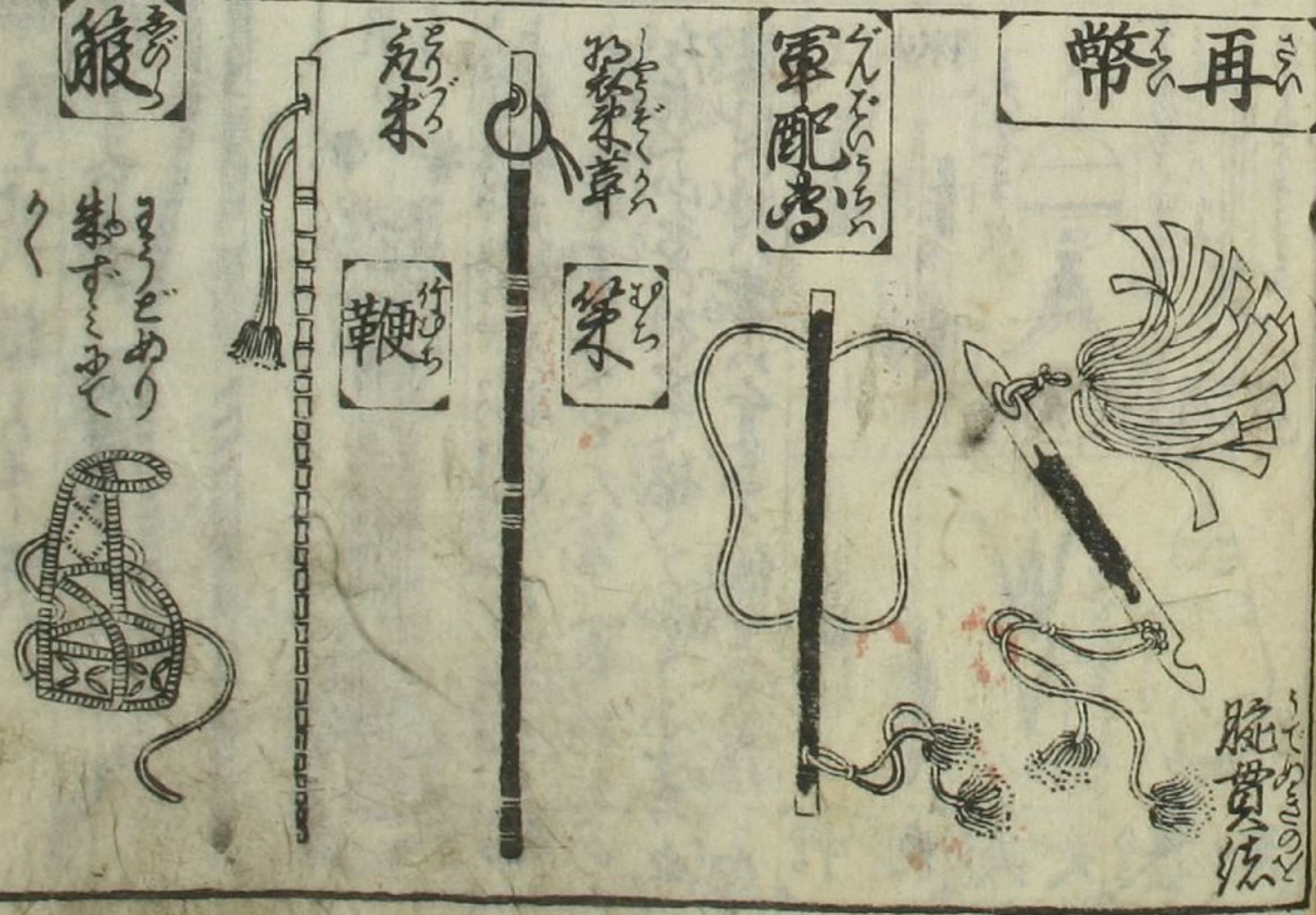
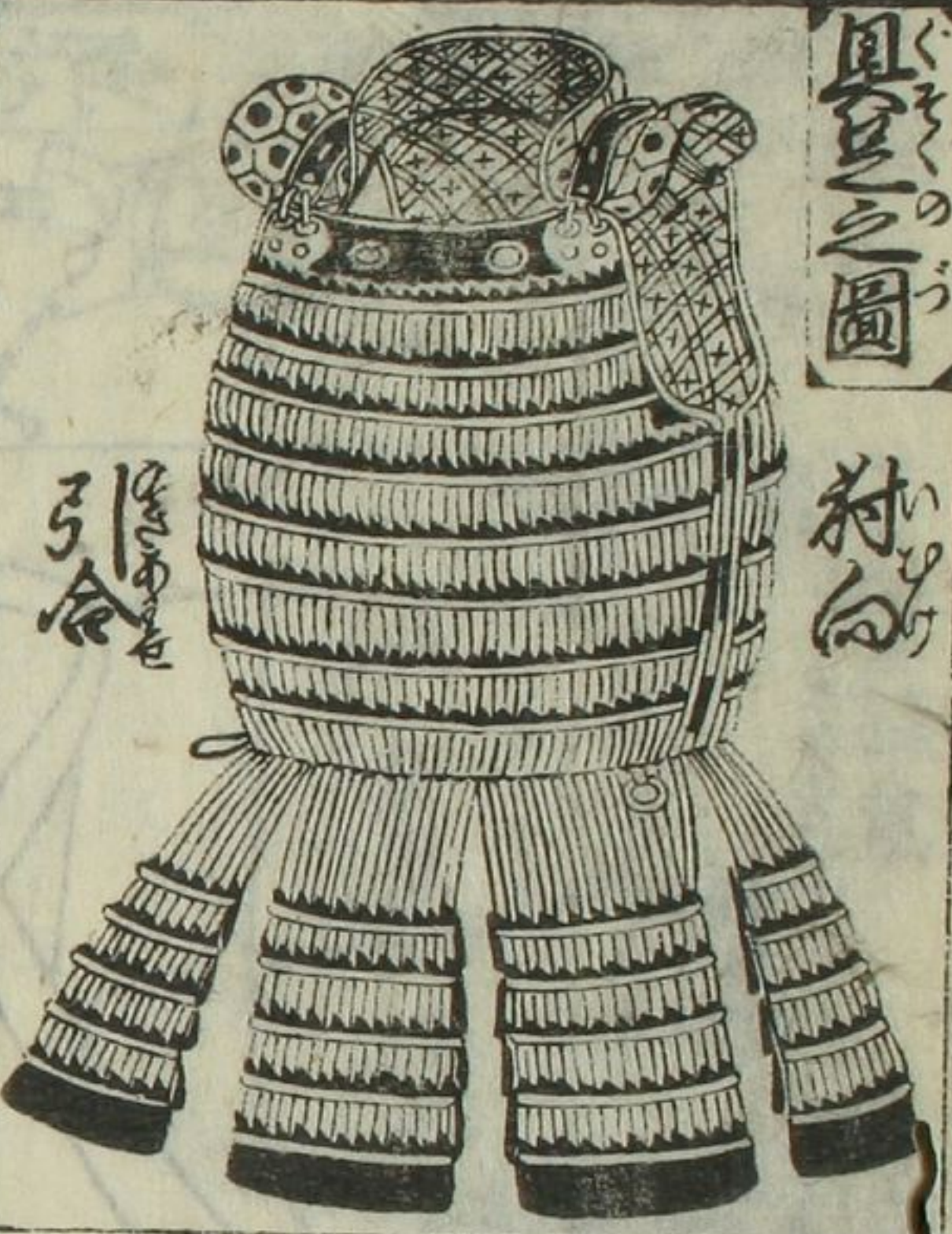
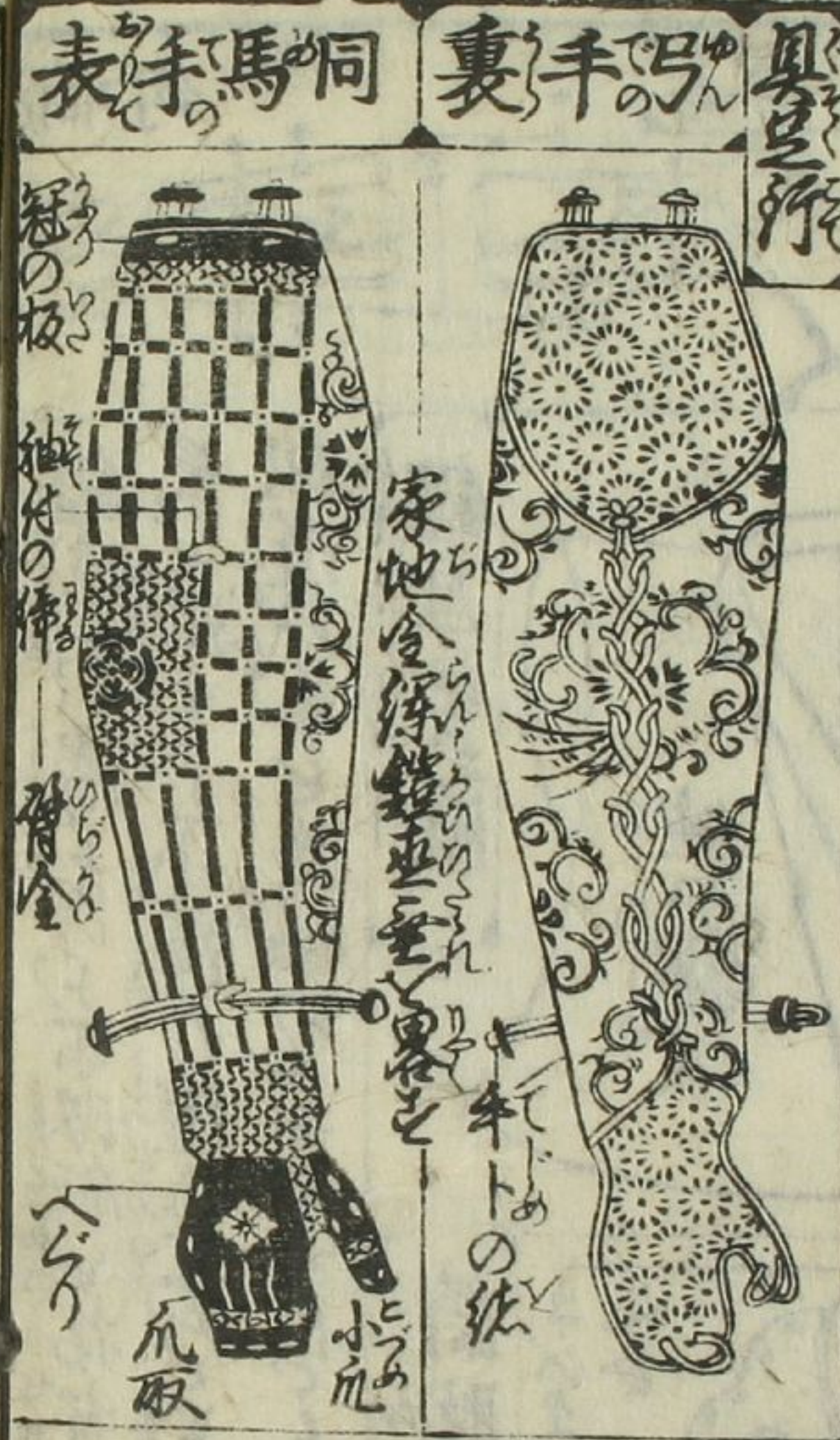
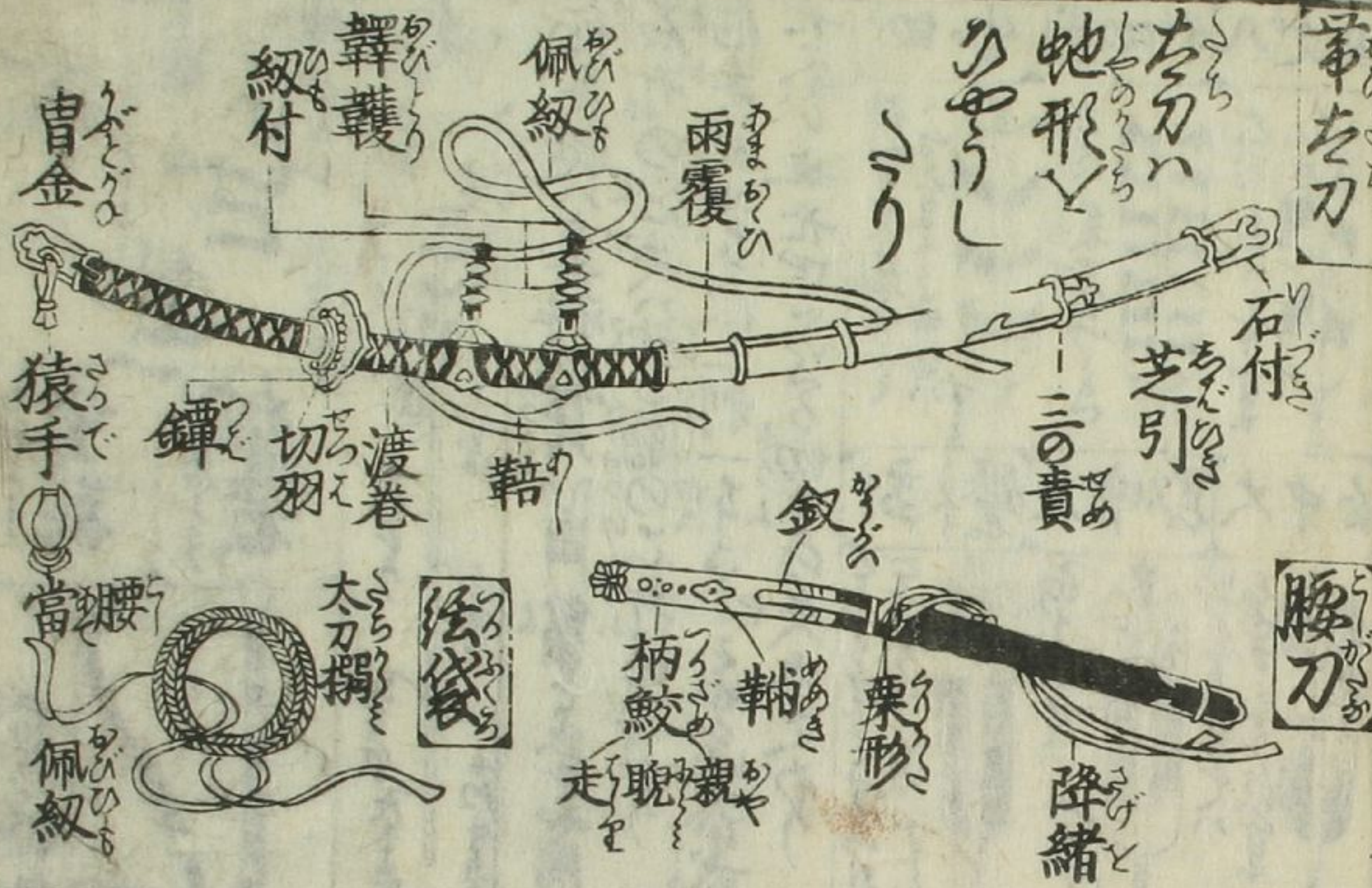
鎧者老の膚若の上ハ双釘と指背に鉄の糸綴り後ハ掛
 糸と造りて小糸の燈虫と若慎修福込等と若
 板燈籠若と流儀わら事おれども畫人の不用の器
 又ハ葉封房 又ハ葉封房 又ハ葉封房



鎧之右 亮葉 何れも草



鎧之右 若刀無の草



具之圖

對向

小袖

双鞞
右左

弓

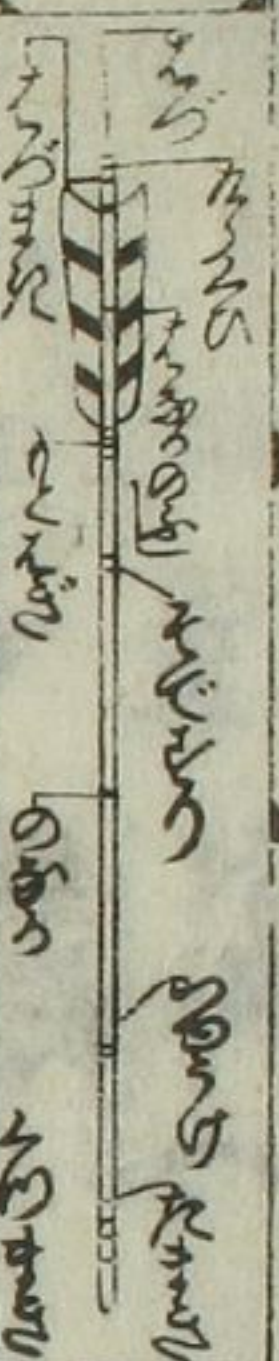


重藤
村重友



右の板梅より三廿六梅より下廿八
強すといふ合派 矢標友

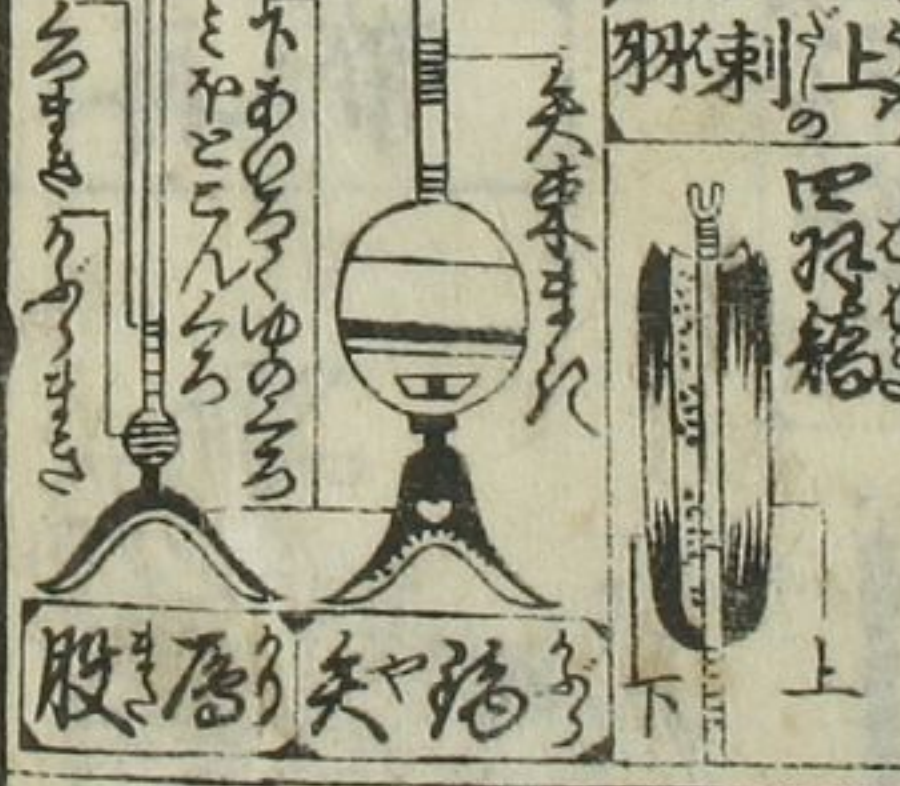
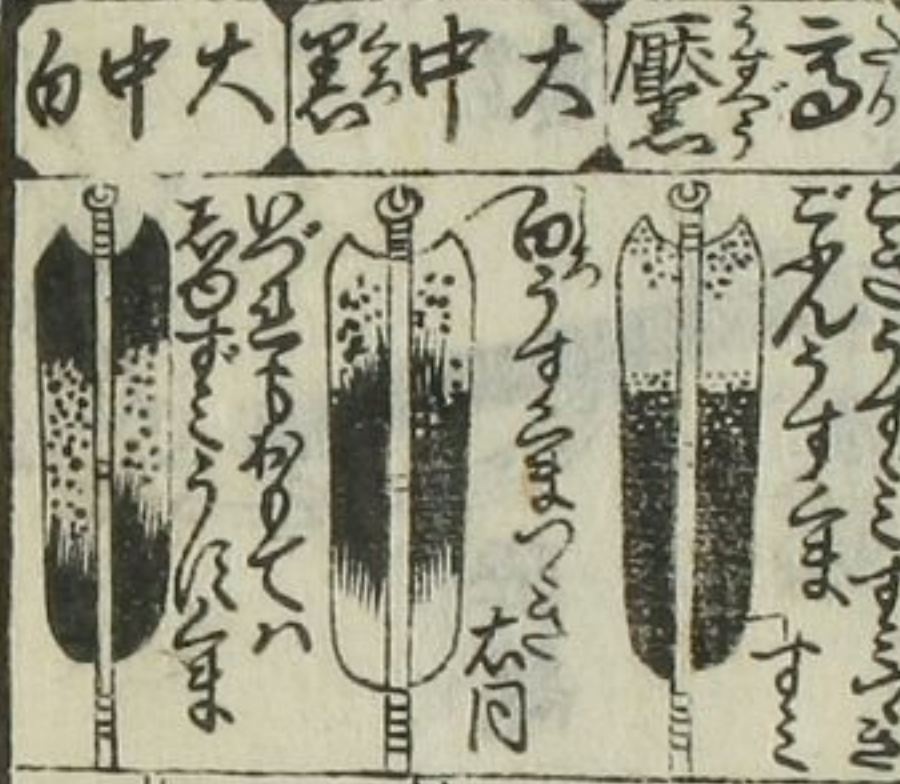
矢



征矢射の真將管ハ 箭と云々を用
石打の征矢ハ 箭の石打の形あり
征矢廿四ハ 利一ハ 箭のゆへ云々
廿四ハ 廿四ハ 切生の矢云々あり



上刺矢 矢馬股 何れも 矢馬股
下刺矢 矢馬股 何れも 矢馬股
矢馬股 何れも 矢馬股



鼓

進之攻南

面小くんやうや
常ハ 朋本地巴登



嬴

象仕子用

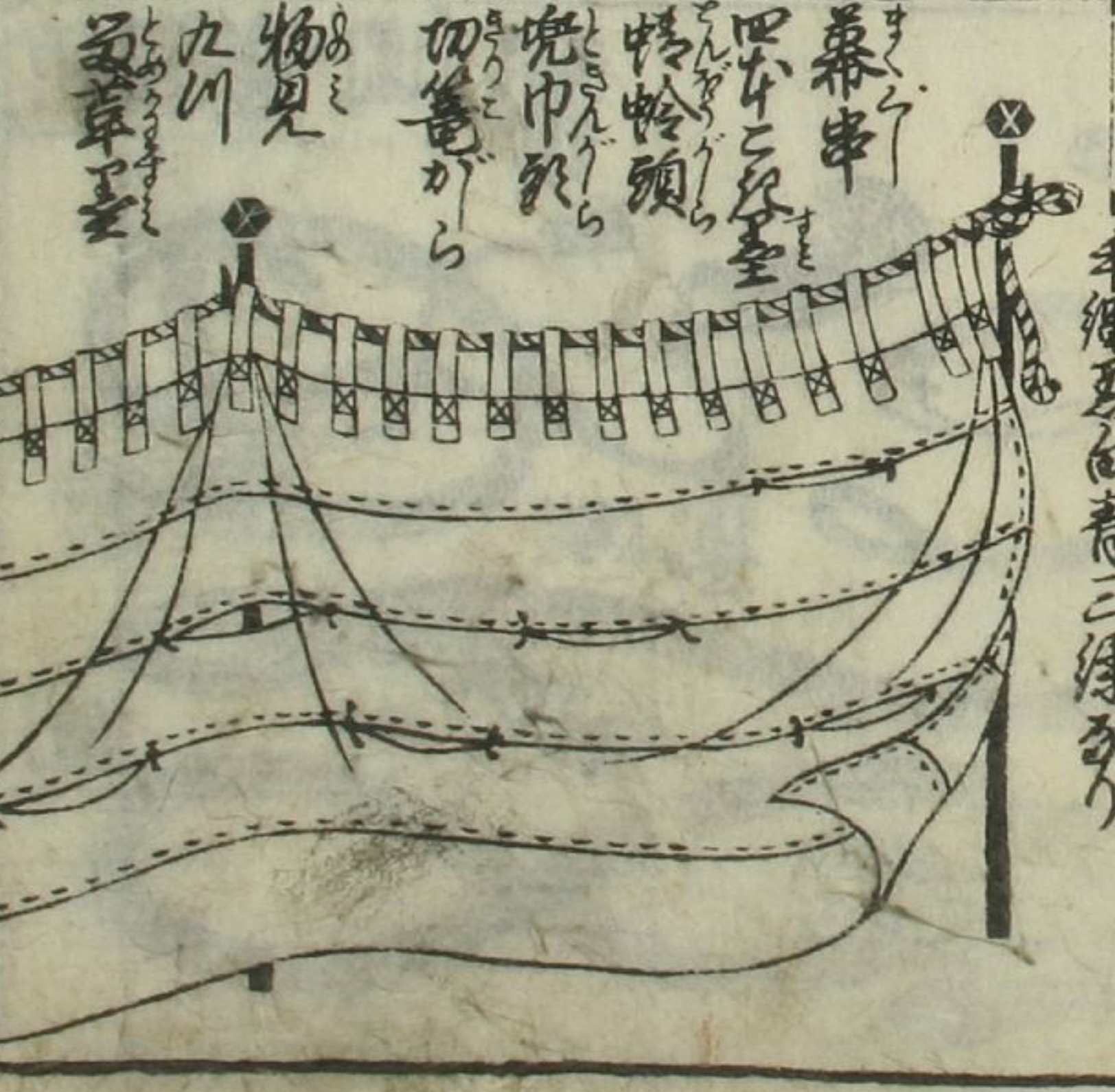
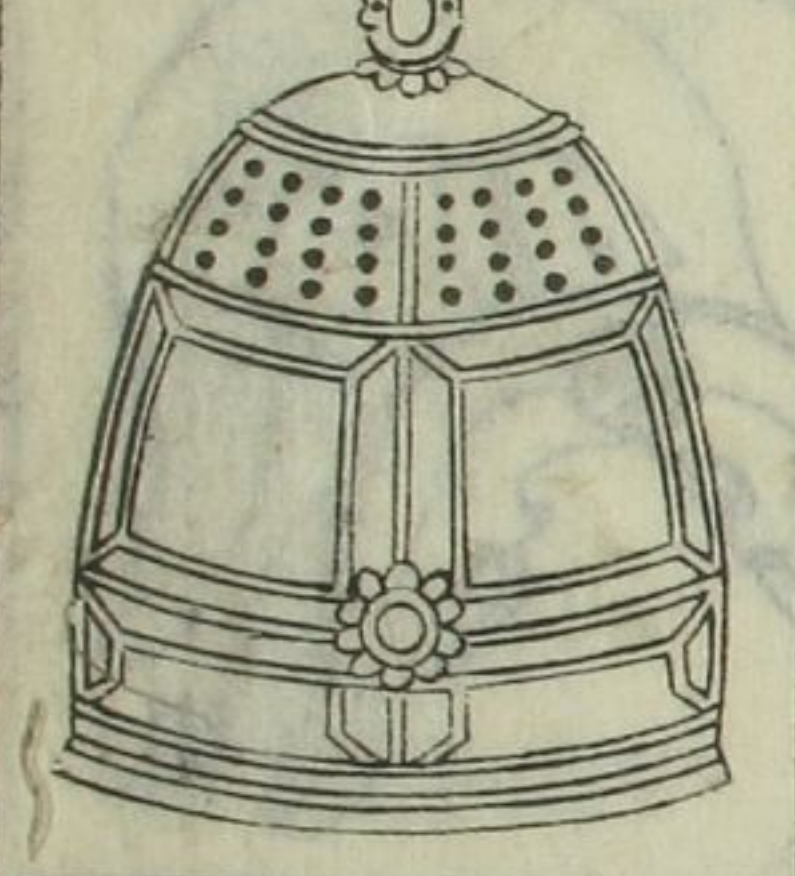
吹者首に掛して
仕立見ハ 黄去
合黄去ハ 朱去
朱のこめハ 朱去



鐘

返之法用

仕立三書線
朱塗草のけ
朱のこめハ 朱去



九川
物見
草草

寫金

鞍

平掛の
平治の異時
香鞆は後と後田
正清のりこり
鳥居左子掛とさのりこり
正清のりこり



總練
鎖練



車
鑿



馬廬神之像



三つ守の神也

乗馬繫馬之圖 品々

押懸の圓

鞆頭



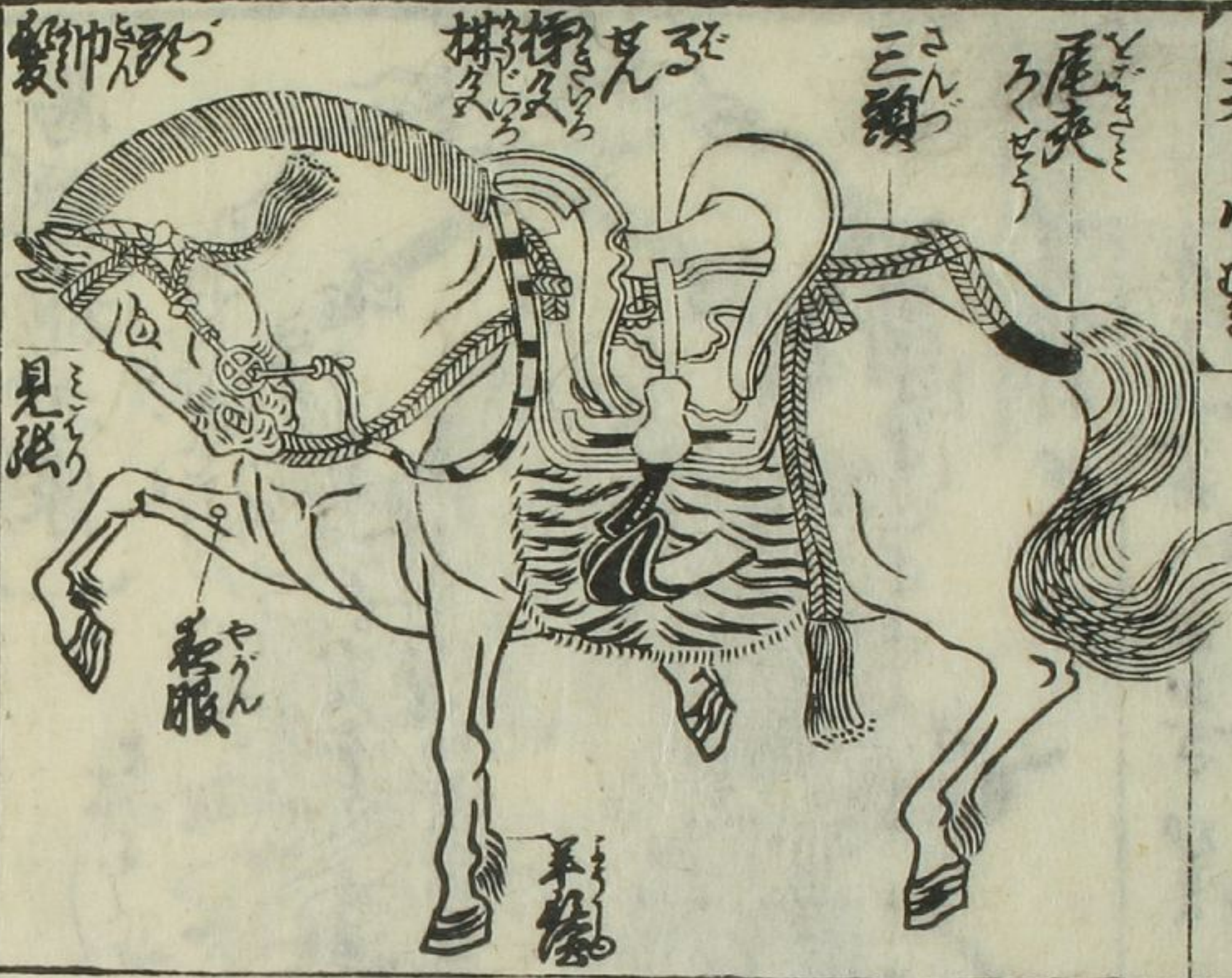
鞆金

胸袋

鞆

軍馬
乗馬

一切又あぐく名不ありと
いふとむすあけさゆは
あつとあるれ



馬

腰服る馬合子養て衆る乃
あつとあるれ
も及白してそ為赤一老るにぬ程
てる月の中朱のくく玉黒く白くさるる



装束馬

牛の備は方光
ひすはたえまを芳也
集徳の事はのらぬ



白馬

純白青馬
純白青馬
純白青馬
純白青馬





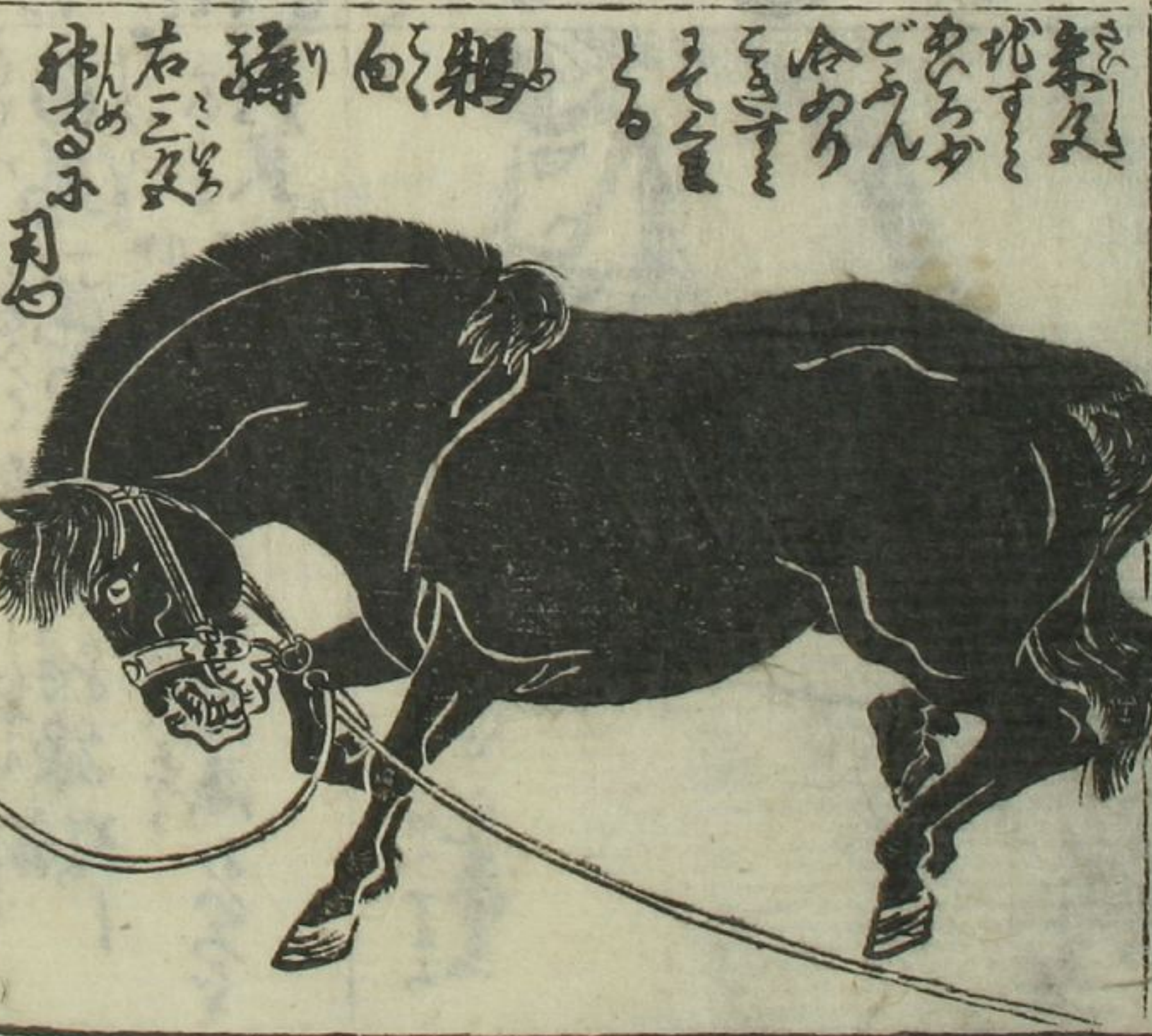
馬
 鶴毛 白く
 丹月毛 斑
 虎月毛 斑
 又 尻 尾 白く 髪 毛 白く
 尻 尾 白く 髪 毛 白く



馬
 槽毛 白く 尾 毛 黒く
 下 墨 具 仕 毛 白く
 下 墨 具 仕 毛 白く



馬
 新文 黒く
 陽 黒く
 陰 黒く
 合 黒く
 尾 黒く
 又 尻 尾 白く 髪 毛 白く

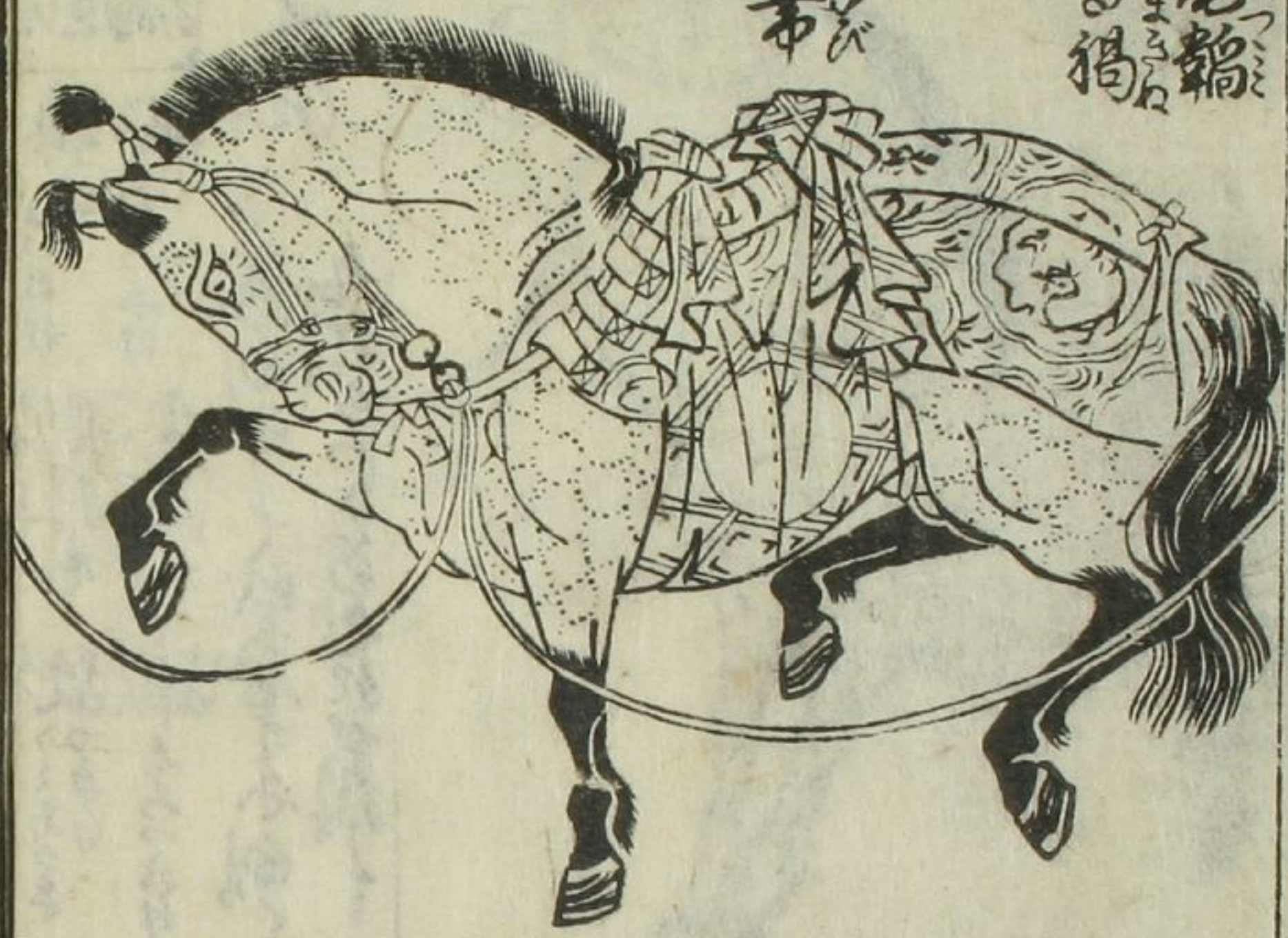


馬
 純黒 鉄 馬
 右 三 文
 作 小 月

馬
 加毛 黒く
 加毛 黒く

馬
 純黒 鉄 馬
 純黒 鉄 馬

驛 連銭 星 黄 虎 赤
 綱 常 的 連 銭 の 紋 々 々 々
 牡 驛 常 的 連 銭 の 紋 々 々 々
 りん 々 々



毛 鞆 子 獨

大 帯

駒 栗毛 驢馬 柳子 檜
 毛 眞 赤 栗 毛 の 眞 赤 栗 毛 同 様 中 心 駒 一

かき 小 帯 々 々 々 々 の 又 々 々 々 同
 眼 かく 一 芥 云
 留 骨 又 同



仕 込 の 焼 煮 去 ぬ り
 朱 墨 同 様 丸 々 々 々
 朱 墨 同 様 丸 々 々 々

騾 青 毛 柳 白 柳 又 柳
 浮 銭 常 的 常 的 常 的 常 的 常 的
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳



騾 麻 毛 赤 麻 毛 柳 白 麻 毛
 傷 毛 眞 赤 栗 毛 の 眞 赤 栗 毛 同 様 中 心 駒 一
 眞 赤 栗 毛 の 眞 赤 栗 毛 同 様 中 心 駒 一

かき 小 帯 々 々 々 々 の 又 々 々 々 同
 眼 かく 一 芥 云
 留 骨 又 同



仕 込 の 焼 煮 去 ぬ り
 朱 墨 同 様 丸 々 々 々
 朱 墨 同 様 丸 々 々 々



維
馬乃白鬃あり
あつてその毛の毛又二重なり
さゆくあるはひんわりなり



後首

後の節

尻の毛

赤原

駿
鶴毛水紋 背の毛又
其土具赤毛は又尾髪赤云



二十八
又十九
と云

眼蓋具
ハハ

駿
額白 雜踏 踏踏
戴星の盧準
馬難のハハ
栗又



鬣

尾の毛

腰の毛

馬
起雲の白馬鬃
御馬殿白あり
馬の毛よりと白
ハハハハハハハハ

武將勇士之圖

神切皇后

神切皇后

神切皇后
 神切皇后
 神切皇后

仲哀天皇御所乃後任者大姉神の出つげふよりて皇居をうつ
 三韓と討つるもふとき時應神天皇御懷胎よりましくは澄の
 へさしゆませゆそそあ中めく刀とさせたまふゆ武内大臣燈の
 へさすのゆ切てあれまふとまうとけいふんといふす始
 一とあり皇居伐た者推大船社とのめする武内大臣燈の



武内大臣

高良明神玉雲命

神切軍三棒にせぬ入
たすお時勢交りうらまげ
御道珠とまげしるまむ
うらまはるく敵の軍共
あふにわはるうや
ゆき軍にから
たすふ



あま
いよま
千歳の珠の
御あり

神切軍后

三棒の軍に傍
たすふと死

踏まて
大石小
文字成
書しまふ
暑



せんと
せんと
せんと

大に赤地の帯



源經基王

長平二年秋の比鳳窠乃藥山よりかくたきく
大さかる牡鹿一五躍出玉作とあけけ花からんとし西念水の
願ふ人奴といへ掃路へ此殿の棟に飛入り重居成りんで
居る事と眼玉赤たぐく口の耳根まてさけさ下の牙生遠
すへ申た公針也經基坊夫亦高勿彼鹿と射落しあふ



六等金丸
小袖白無地

ちんちん

鏡の念せお
西で中と
け敷の中夫
おがごと
畫と

源道仲

杯は源仲と云ふ

古今に名お仁

義の賢者あり其先は親と 清和天皇の皇子貞純親

王の子鎮守府の軍六孫王経基の嫡男也初延喜

氏と傳へたる小幸一子にては時世勅で治せり

道く無道の人のわれとて中をさすは源家

榮天下泰平なり神社佛宮建立しり

武時の養中に龍女来て訪ふと云り後景

系絶ありて神徳を蒙りて大蛇返治し居地は

たまふ磐切持たる雲願の源氏累代の重寶なり

嘗て自刃れ像と刻ぐ末代は矢の守護神と云

自他の御説法抄しりよと也彼龍女来て訪ふと

なりしよと云ふ事

源仲の信は不詳也のせは是

入り頼一遊のまふり男も

有龍女来て訪ふ事あり

身をもととほ事ありふん

我の龍女身が他のいれ

返治ありてまふ

たどける面も

別源仲許言あり

一か女ららと云

龍一正引と云

は長等てあり

とほ絶す

常ありある

玉ありし也



龍女

源道仲

源頼光

兼中は桐花女が

弓矢の大事とほたすふ

蛇頭弓一張

水破 鳥と鶴の羽をなす

無破 山鳥の尾をなす

雷之初八指の石鳴る

雷のわし

故又はつねあり

紫早黄文の連重

大長男が國おぼと

後天代は源頼光政

又知り勝教は佐多

と射つり一とけ

弓矢の徳や

源頼光



桐花女弓矢
徳



源頼光

永徳二年内秋頼光船匠とてり小出頼朝とてり

出り小出とてり中より海のおとくをたどり立出候とてり
端心勇義の女子小弓矢張らるる我の唐土養由基の女
妹花とてり女あり我交りり弓矢の秘訣とてり是と兼代
小信んとて欲ふ我男子とてるる下に是下等量ありとてり
術とて候とてりとてり女ありとてり是と兼代
是より射藝天下に双人もありとてり後丹羽千丈頼光鬼形
之方民徳の宣方りりしとてり先任者八幡徳義三所新撰
鬼神道治の宣方りりしとてり征討あり海山すてよる後
一とてり六人山伏のころとてり
くりいんせんとのこまふとてり後あるとてり人ありとてり
山後ノ業内とてり子孫はとてりやうとてりはねとてり理り
頼光也まのせんともとてり山とてり後とてり後とてり
人にて中より山後とてり我らとてり海のいん入てつとてり
うれいといんといんといんといん
ふりてやまのせいんといん
人との事といんといん
人ありといんといん
是よりいんといんといん
中よりいんといんといん
我よりいんといんといん
あつとてり鬼形といん
らんのまといんといん
鬼畜といんといんといん
好むといんといんといん
とてりといんといん
いんといんといん
何といんといん
はてしといんといん
あつといんといん
とてりといんといん





山入之圖

山入之圖

山入之圖



寫金卷三

後逸總 當すらん天正四年四月十日の教教光の

御使小一条大定へ召るおれど道乃程用紙の
この御出刀懸切とせらるるかくて一条堀河の
度指中にお申と女より逢おんまなましく
まわらぬ糸のりまてゆきありたてりてさび
おん中より小纏を巻と思ひ入り飛下安さ
ゆりはるるおとせとかしこの勢外に申て彼所か
怒し死鬼となり纏が解り流りて提り纏を
さかす懸切と相と扱を極よ冠が子然と白切
任生れりるさかすありおあり



鬼女
黒髪
髪
柳粉
おとせ

白と
緑と白と

麻毛

城之紫の千ら



破子

金

此圖八平忠常本國下
 総之本城也要害無双
 城也海上卅里面廿余
 町渡無船頼信蒲湖之
 時察敵之油斷自先驅
 五方味方續渡忠常防
 方無而終降病死

源頼朝の海邊渡り圖



下信
 浦人海の
 防戦ヤ
 ころし

源頼朝 平忠常傳報一平信小次郎の事なりて其の事
 勅命とありあり向ひの事小次郎城後へ言ふ山前へ海に廿里海の面
 廿余町要路を設けり其の忠常備くの舟にたれかかると源氏後
 へ言ふありおに頼朝信濃と尋ねて海湖の事申に事あり
 なる小次郎率も何と申し大おの事やう干かすおの事を用金
 なる今さら湖の時をせんんそと先絶して後より一歩
 其方金持つるに後り終る忠常とやらはしる事あり

源頼朝 奥羽安倍頼朝と戦ふ事小次郎の事月七日とて
 ぶ小次郎天志のぶとてたれは頼朝の事なりと士率湯に
 うに院小次郎うりしるに頼朝信天よりうりておとひら清と
 してあつらの事成らうらたれひしる城の事ありての事間あり
 清あつらに浦をより信率にありて信で湯にうりて一先天の
 御ありと常進で打てお終る信進とてしる事あり

源頼朝
 水傳之馬



軍勢あり
 頼朝

加勢一第侍騎
カセノ 一ダイシキ



壘盤金泥
ウツバタナニ

征する日けりし
軍士と支營ふ
故は營とといふ
を佳例ふ何せ
はあましく對面
たすまふ

清原氏別
シヤハラのウヂノ

鎮守府の軍
奥州東本郡
中へおねま令のお



鎮守府の軍
チヌシノ

頼義
タヨシ

官軍二千侍騎
カンクンニチシキ

法原武則と法守府の軍源於義と合の事

天徳元年の冬源於義の軍千八百餘騎中安徳貞任が
 千餘騎と奥羽鳥海を我よりありしを多風烈く降参
 して強一往來を終り日較して一往方共糧盡精力
 劣して戦利ありずは僅く七騎とぬて法守府に
 降りぬるは後出將法原真人武則は加勢といひ義朝
 子細多く領事して一万余騎とす一尚は東原
 營を置きてお軍と云合あり先づして法原の押從と云
 らるる時武則室城と稱し天地は誓ひ臣院小子弟と後
 お軍の命に應じて志一節と云るふ出り力と殺とこと成
 と云伝と誓りたる法軍勢先々感涙と流さすといふ事あり
 それより於義と力合を武略我切といひまゝ終り貞任
 とやらはしるる干時康平六年八月九日あり

早稲田大学図書館

011688993379